

特殊報

奈良県病害虫防除所長

令和元年度病害虫発生予察特殊報

1. 病害虫名 クロテンコナカイガラムシ *Phenacoccus solenopsis* Tinsley

2. 発生物種 ホウレンソウ

3. 特殊報の内容 本県における農作物での初発生を確認

4. 発生地域 奈良県北和地域

5. 発生確認の経緯

- 令和元年10月下旬に奈良県北和地域の施設栽培ホウレンソウほ場で本種と疑われるコナカイガラムシ科雌成虫が確認されました。
- 神戸植物防疫所に同定を依頼したところ、本県で未発生のコロテンコナカイガラムシと同定されました。

6. 分布と生態

- 本種は北アメリカ大陸原産と考えられ、その後の分布拡大により、現在、南アメリカ、アジア、オセアニア、中東、アフリカの広範囲に分布していることが報告されています。
- 国内では沖縄県での生息が知られており、その後、佐賀県、福岡県、愛知県、山口県、高知県、鹿児島県、大阪府での発生が報告されています。
- 本種は広食性で、ワタ、オクラ、ナス等53科154種の植物に寄生することが報告されています。現在、国内では、ナス、トマト、食用トレニア、食用金魚草、スイゼンナ、ヒマワリ等の農作物のほか、ブタクサ等の雑草での発生が報告されています。
- 本種の雌成虫は平均で350個程度産卵することが知られています。産卵はワタ状のロウ質物質でできた卵のう内に行い、卵の多くは雌成虫の体内でふ化します。ふ化幼虫は数日間卵のうで過ごした後、歩いて分散します。1世代の発育期間は単為生殖個体群の場合、平均70日程度になります。

7. 形態と被害

- (1) 雌成虫は翅を持たず、体は楕円形（わらじ形）で、体長は3～5mmです。背面に白いロウ質物質を分泌するので白く見えますが、一部薄いところがあるので、2齢幼虫以降は、ルーペなどで観察すると、背面に黒点があるように見えます（図1）。
- (2) 生長点付近の茎葉に寄生し、分泌した甘露がすす病の原因となります。本種が多発すると、植物の生長が抑制されます。今回、本種の寄生が認められたハウレンソウでは葉の萎縮が確認されました（図2）。

8. 防除対策

- (1) 令和元年12月2日現在、本種に登録のある農薬はありません。
- (2) 茎葉への本虫の寄生と、これらが分泌する甘露及びそれによるすす病を目安に早期発見に努めてください。発生を確認した場合、ただちに発生株や生息部位を成幼虫ごと除去し、施設外に持ち出して土中に埋めるなど、本種の発生が広がらないように適切な処分を行ってください。
- (3) 本種は、ほ場内の作物だけでなく、ほ場内及び周辺の雑草に寄生している可能性があります。ほ場内および周辺での雑草対策を徹底してください。



図1 クロテンコナカイガラムシ



図2 本種が寄生したハウレンソウ葉

お問い合わせは

奈良県病害虫防除所
TEL. 0744-47-4481

病害虫防除所ホームページ
<http://www.jpnp.nara/>